

早稲田大学大学院日本語教育研究科

【2026 年 4 月入学 博士後期課程】

一般入学試験

国費留学生等入学試験

事 前 課 題

課題文を読んで、2500 字から 3000 字程度で設問に答えなさい。その際、資料や文献を参照し、それらを明記すること。参考文献や引用文献等のリストも上記文字数に含みます。

設問

課題文の論旨を 300 字程度でまとめなさい。その上で、日本語教育学においてはどのような研究課題となり得るか、2 つ以上の研究課題を提案した上で、それぞれで得られる研究成果の可能性や限界について、根拠を示しながら具体的に述べなさい。

課題文

ステレオタイプ

日本人論では、こんなふうに言われてきました。「日本人は集団主義的、アメリカ人は個人主義的」、「日本は恥の文化、アメリカは罪の文化」、「日本はタテ社会、アメリカはヨコ社会」、等々。こういう具合に対比されると、日本人とアメリカ人は、「別種の生き物」であるかのような気がしてきます。ところが、それぞれ、どれぐらい集団主義的なのか、事実をきちんと調べてみると、日本人とアメリカ人のあいだには、言われているような違いはないということが分かりました。「日本人は集団主義的、アメリカ人は個人主義的」というようなステレオタイプの見方は、現実を正しく反映してはいなかったのです。

「ステレオタイプ」という言葉は、ウォルター・リップマンというアメリカのジャーナリストが広めた用語です。リップマンは、20世紀の半ばに活躍し、「現代ジャーナリズムを創始した」とまで言われたほど大きな影響力をもっていた人物です。

ステレオタイプは、カテゴリーの一種です。その点では、「犬」や「猫」と変わりません。カテゴリーが「ステレオタイプ」と呼ばれるのは、たいがい、次の2つの性質を兼ね備えていることです。第一に、型にはまった見方を強いること。第二に、価値判断を強いること。

典型的なステレオタイプは、公民権運動以前、アメリカの白人の多くがもっていた「黒人」というカテゴリーでしょう。「黒人」であれば、誰であれ、「怠け者」で「頭が悪い」と見られてしましました。

「文化ステレオタイプ」は、文化の違いにもとづくステレオタイプです。「集団主義的な文化をもつ日本人」「個人主義的な文化をもつアメリカ人」というのは、まさしく典型的な文化ステレオタイプにほかなりません。

いわゆる「国民性」も、文化ステレオタイプの一種です。「イギリス人は紳士の」、「ドイツ人は規律正しい」といったイメージが流布していますが、イギリス人とドイツ人は、人種が違うわけではないので、こういった「国民性」は、人種ではなく、文化にもとづくステレオタイプということになります。

ステレオタイプが生み出す錯覚

ステレオタイプにとらわれていると、現実を大きく見誤ってしまうことになりがちです。これが、ステレオタイプが問題視される理由です。

「日本人は集団主義的、アメリカ人は個人主義的」と聞くと、図 19（上）のような違いを漠然と思いつかべてしまいます。「日本人は、いつも、とても集団主義的に振る舞い、アメリカ人は、いつも、とても個人主義的に振る舞う」というイメージです。これを「両極性の錯覚」と呼ぶことにしましょう。

また、個人差を忘れてしまうことになりがちです。「日本人は、みな同じように集団主義的、アメリカ人は、みな同じように個人主義的」というイメージです。これを「斉一性の錯覚」と呼ぶことにしましょう。

しかし、じつさいに集団主義・個人主義の程度を測定してみると、日本人の平均値とアメリカ人の平均値のあいだに「統計的に有意な差」（偶然に生じたとは考えにくい差）が観察された場合でも、データは、図 19（下）のようになっていることが普通なのです（平均値の位置は、点線で示してあります）。平均値には違いがあつたとしても、個人差が大きいので、データの分布は、大部分が重なってしまうのです。

この場合、「この人は日本人だから集団主義的だろう」とか、「この人はアメリカ人だから個人主義的だろう」とかいった推測はできません。なにしろ、半分近くの日本人は、アメリカ人の平均値より個人主義的なのですから（なお、△中略▽これとは反対に、日本人の平均値がアメリカ人の平均値より個人主義的になるというデータも多いのです。それを忘れないようにしなければなりません）。

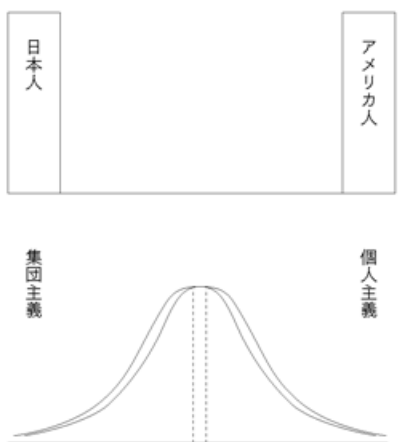


図 19 ステレオタイプ的な文化差のイメージ (上) と実際の文化差 (下)

言語レベル

こうした「両極性の錯覚」や「斉一性の錯覚」が生じる最大の理由は、ステレオタイプが言語

で表現されることです。「日本人は集団主義的、アメリカ人は個人主義的」といった具合に。

言語は、もともと、物事をカテゴリーに分けて表現します。連続量もカテゴリーに分けます。

「高い」「低い」といった具合に。

「高さ」を連続量として表現するためには、測定が必要になります。しかし、いちいち測定をしなければならないのでは、コミュニケーションが滞ってしまいます。そもそも、言語が生まれた先史時代には、物差しはありませんでしたから、測定をすること自体、不可能でした。「高い」「低い」といった直観的なカテゴリーに分けるほかなかったわけです。

しかし、カテゴリーを使うと、カテゴリーのなかの違いが隠れてしまいます。よく「英語ができる」「英語ができる」という言いかたをしますが、「英語ができる」と言われると、つい「英語がペラペラだ」という気がしてしまいます。じっさいには、「英語ができる」といっても千差万別で、字幕なしの映画を見ていて、英語のセリフを100%聞き取れる人もいれば、40%しか聞き取れない人もいるわけです。なのに、その違いが意識にのぼりにくくなるのです。「せいじつせい齊一性の錯覚」です。

連続量を言語でカテゴリー化する場合には、しばしば二項対立になります。「高い、低い」もそうですし、「良い、悪い」もそうです。文化について語るときにも、「集団主義的、個人主義的」というように、二項対立になりがちです。二項対立では、間が断絶しているので、どうしても両極端をイメージすることになって、これが「注略両極性の錯覚」につながります。

『FACTFULNESS (ファクトフルネス)』という本があります。注略「最新統計を見ると、世界の見方がガラッと変わる」ということを教えてくれる本です。この本の著者ハンス・ロスリングは、「『先進国』と『途上国』というふうに2つに分けるのではなく、4つに分けるだけでも、世界の見方はずっと正確になる」と指摘しています。

ロスリングたちがネットで公開しているグラフは、連続量をそのまま表しています。測定値があるのなら、言語に頼る必要はありません。グラフにすれば、連続量のままで伝えることができるわけです。

高野陽太郎(二〇一九)『日本人論の危険なあやまち―文化ステレオタイプの誘惑と罠―』デイス
カヴァー・トゥエンティワン(二三〇―二三六頁)